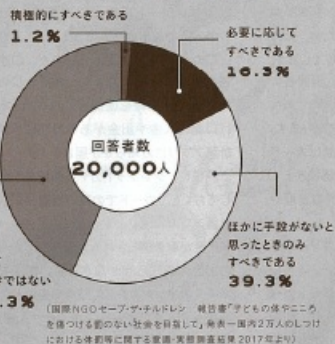


# 「たたく」「どなる」も体罰のひとつ！ 考えてみませんか？ 子ども目線

知っていますか？

## 2020年、日本は「体罰禁止国」に!!

### しつけのためなら体罰はOK?



3年前の調査では、日本人の約6割が肯定的!



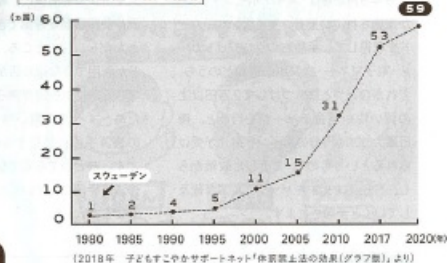
日本では昔からおしりをたたくことなどを、「しつけ」の一環として行ってきた背景がありますが、「しつけのためなら体罰もやむをえない」という意見が過半数が肯定的。そんな姿勢を社会全体で見直す時代がきています。

ここ数年、虐待によって子どもの命が失われる痛ましい事件が大きく報道され、「子どもの命を守りたい」という世論が高まっています。児童相談所への児童虐待の相談件数は増加の一途をたどっているといえます。

1994年に「子どもの権利条約」を批准してから四半世紀、日本はこれまでも国連・子どもの権利委員会から、家庭での体罰などを法的に禁じるよう繰り返し勧告を受けてきましたが、今年4月、児童福祉法の改正法が施行され、ようやく体罰が許されないものであることが法制化。世界で59ヶ国目の「体罰全面禁止国」になりました。

どんなに軽いものでも、体罰を法的に禁じることになった私たちの社会。とはいえ、すぐに体罰のない社会が実現するわけではありません。ひとりひとりが意識を変え、子育て中の保護者に対する支援も含め、社会全体で取り組んでいかなければならない問題なのです。

### 体罰全面禁止国の数の推移



### 親を含むすべての人の子どもに対する体罰を禁止! たとえ「しつけ」でも、体罰はダメ!

たたく、なぐる、暴言を吐くといった行動が人権侵害となるのは、相手が大人でも子どもでも同じ。「自分の子どもだから」「しつけだから」といって、許されることではありません。すべての子どもは、「子どもの権利(※)」が守られ、人権を侵害されることなく、すこやかに成長・発達し、自立していく権利を保障されています。どんなに軽い体罰も行わず、子どもを心身ともにすこやかに育てていくことは、親を含めた保護者すべての大人の務めです。

※子どもの権利条約(子どもの権利条約)には、生きる権利、育つ権利、守られる権利、夢を追う権利という4つの原則があります。子どもにとって、いちばんよいことを子ども自身に聞いて、子どもとともに考えていくことが大切です。子どもも大人も、子どもの権利を知ることが必要になります。

## の子育て

赤ちゃん時代を過ぎ、1・2・3歳になると「しつけ」を考えはじめる時期。「しつけ」だからと親が子どもに手をあげることが、法律で禁止されたのを知っていますか？ たたくこと、どなることも体罰等のひとつ。体罰によらない子ども目線の子育てを、いっしょに考えてみませんか。

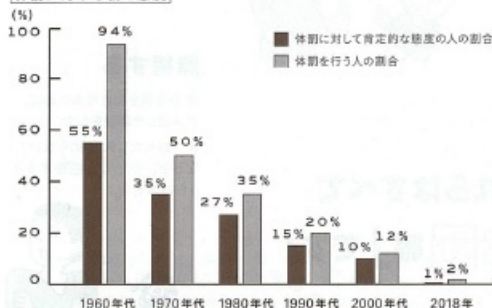
### PROFILE

監修 高祖常子(こうそとこ)  
0PO5人子どもすこやかサポートネット  
副代表理事  
子育てアドバイザー、児童虐待防止全国ネットワーク理事、厚生労働省の「体罰等によらない子育ての推進に関する検討会」委員なども務める。保育士、幼稚園教諭などの資格を持つ、3児の母。

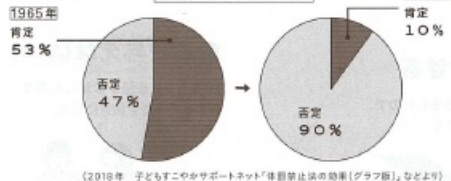
## 体罰を法律で禁止すると、社会はどう変化すると?

### 世界で最初の体罰禁止国スウェーデンに見る変化

#### 体罰に対する親の態度



#### 体罰に対する親の支持



今から約40年前に体罰禁止の法律を導入したスウェーデン。1960年代は、子育てで体罰を行っている人が9割にものぼっていました。しかし、最近の日本と同様、子どもの虐待死が社会問題となり、1979年に法改正され、世界で最初の体罰禁止国に。その後の調査では、体罰に対する親の態度は否定派がふえ、体罰は減少しています。たたかれる子が激減した社会で育った子どもたちは、学校などでも相手を尊重するようになり、いじめも減っていったそうです。

### 高祖常子さんが見た スウェーデンは、 子どもを尊重する国!

「たたかない」と決める子育てを  
広めよう!と決意しました

育児情報誌「miku」の元編集長でもある高祖さんは約10年前、体罰禁止法を導入し30年たったスウェーデン取材で訪れました。そこで見たのは、子育てのなかで、たたく、体罰を加えるなどの選択肢がない社会。たとくすべでが虐待につながるというわけではありませんが、たたいた手を止められなくなる親がいるのも事実。「ならば「たたかない」と決めればいい」。その考えを広めよう、高祖さんは決意しました。

スウェーデンでは、子どもは王様のように尊重される存在。一方、日本では、親が子どもに言うことを聞かせられない「しつけができていない」「甘やかしているのでは?」という周囲の目が気になるという声もあります。親だけでなく、社会の認識も変えていくことが重要。そんな思いから、今回の法改正にあたっても各方面に働きかけ、奔走した高祖さん。以降、講演、執筆、テレビ出演などを通じて、虐待のない親子関係をサポートする活動を続けています。